



住宅街とは思えないほど緑に囲まれている。空が広く気持ちがいい。庭にはふたりが希望していた大きな木も。

理想の外人住宅に出会うまで
紆余曲折ありました

住宅街の細い路地を通り抜ける
と、まるで森の中に迷い込んだよう
な緑が茂り外人住宅が建ち並ぶ場所
に行き着く。「引越したばかり
で、まだ何にもない状態ですよ」と
笑顔で招き入れてくれたセソコマサ
ユキさんとエミコさん。広々とした
LDKのフロアに、アンティークな
ワゴンやテーブルがぼつんと置かれ
ているだけだが、一見してセンスの
良さを感じる。

沖縄に来る前は、東京で編集者と
して忙しい日々を送っていたマサユ
キさん。「ふたりとも働いていて、
僕の方は週末もイベントが入ったり
と、とにかく忙しかった。好きな仕
事をさせてもらっていたけれど、ふ



右/白い壁にはられたto doリストや考案中のメニュー。やるべきことがたくさん書かれていて、まさに現在進行形の様子が微笑ましい。広いLDKと廊下の奥に3ベッドルームという外人住宅らしい間取り。
左/まだ片付けていないんですよ。と案内してくれた個室。作り付けのクローゼットには、読書家らしく、さまざまな種類の本が並ぶ。さりげなく飾られたふたりの写真も素敵。



朝の光が降りそそぐ室内。くるんと曲がった窓の格子や、レトロな扇風機も部屋の雰囲気にとりあって可愛い。テーブルはマサユキさん手づくり。

たりの時間が持てないことに、これ
でいいのかなと考えるようになりま
した」。心機一転、場所を変えて、
あたらしく自分たちの暮らしをつく
っていきこう。移住先を沖縄に決めた
のは、旅行で訪れて好きだったこと
と、マサユキさんのルートが沖縄に
あることも縁を感じたそうだ。沖縄
で暮らしたら、何かふたりでできる
ことをやりたいね。と話し合ったと
き、エミコさんはパン屋さんを開き
たいと思った。もともとパンづくり
が好きで、東京の教室に約5年ほど
通って本格的に腕を磨いた。その経
験を生かして、おいしいパン屋さん
をつくる夢がふくらんだ。

そして去年の7月、沖縄に移住し
てきたふたりが最初に住んだのは那
覇にある古い共同住宅だった。「家
を探すまでとはいえ、せっかく沖縄
にきたのに普通のアパートじゃなん
だかつまらない。復帰前に建てられ
た古い共同住宅を見つけて、家賃も

時間をかけても心からいいと思
うものにこだわりたいというふ
たり。外人住宅のシンプルな空
間に古道具やアンティーク家具
がじっくり馴染んでいる。

◎特集 外人住宅

好きなものに囲まれた ふたりの暮らし

古いもの、良いものを長く愛しむセソコさんが住む家

ふたりの時間をもっと大切にしたいね。

そう思った編集者の夫とパンづくりが上手な妻は、

南の島に住んで週末だけのパン屋さんを開くことにした。

そんなふたりの店を訪ねて行けるのは、きつと来年の春ごろ。

今、はじまったばかり。

ここから、ひとつひとつ夢を自分たちの手でつくっていく。

撮影・青塚博太



安いし、コンクリートにペンキを塗っただけの壁がちょっと外人住宅みたいで面白いなと思ったんです」。仮住まいでも、古くていいなと感じるところに住む。なんだかふたりらしいエピソードだ。

可愛くて感じのいい建物を探し求めていると自然に外人住宅に絞られていったという。主にインターネットで賃貸情報をチェック、また車に自転車を積んで、時間があると外人住宅が集まったエリアに行き、空き家がないか自転車で見て回った。

「外人住宅は人気が高くて、いいと思った物件が見つかってすぐ不動産に連絡しても契約済というのは本当に多かった」とエミコさん。また、店をやりたいと言うと断られることもあった。「すごく気に入った物件があつて、企画書まで作って説得に行つたんですけどダメでしたね」。外人住宅のカフェが増えていくので、ぜひ貸したいという人もいれば、路上駐車などで近所とのトラブルの原因になるから嫌だという大家さんもいるそうだ。

できれば海が見えること、庭に大きな木があること、シンプルな造りで自分たちで手を加えやすいことが家探しの条件。現在の場所は遠くに少し海が見え、緑が豊かで、視界を遮るものがないので空が広くて開放

感がある。建物が比較的きれいなことも決め手になった。いいんじゃない？ふたりの思いは一致した。「もう見つからないかもしれないと思つていたので、安心しました」。

自分たちで工夫しながら暮らしていく楽しさがある

実際に住んでみて大変なことも多い。「覚悟はしていましたが、暑いですね。コンクリートに蓄熱するので、夏は夜9時をまわっても室内の温度が35℃もあつたりして、外の方が涼しくて気持ちいいですよ」。虫が多い、湿気が多いなど悩みもあるが、出来る限り自分たち

の手できれいにリフォームしていききたいと考え、丁寧につくっているものが好き

テンプルや棚などDIY系はマサユキさんが、細かい修理や手入れはエミコさんが担当。実はエミコさんが器用できっちりとしていて職人肌なんだとか。床も自分たちでフローリングにしようと思つていたが、近所の材木屋さんから外人住宅の床に直接板をはつたらすぐに湿気でダメになってしまうと聞き、プロの手を借りるべき必要性も感じている。一進一退だと言いつつ

もなんだかとても楽しそう。ふたりともアンティークが好き



- メニュー候補の「エッグベネディクト」。ハワイで朝食に出された味を自分たち風にアレンジ。自家製のピクルスやトマトの冷製スープも美味。
- マサユキさんの著書「あたらしい沖縄旅行」。カフェやパン、雑貨などセンスがよくて気取りがない、ちいさなお店とつくり手たちを紹介している。
- エミコさんがつくったパンを使ってサンドイッチや料理を仕上げるのはマサユキさんの役割になる。



- ガス台にのせて使う古いオープン。見た目が可愛いとどうしても欲しくなる。
- フライパンが吊るされている白いタイルは、エミコさんが電動サンダーとヤスリを使って目地の部分までピカピカに磨いた。



編集者として本の仕事をしながら、週末はいっしょにパンの店を開くのが夢。高校の同級生だったふたりはとても仲良しで、気に入ったものが見つかるまでねばる、こだわりの姿勢も息びつたり。

で、蚤の市や旅行先で買い集めた古道具や家具などインテリアが魅力的。「とりあえずで買うのはやめようね。いいなと思ったものだけを長く大切に使うってこうね。と決めていきます」とエミコさん。新しい古いに関わらず良いものを長く大事にしたいという思いで選んでいる。

「大切に使う時間の積み重ねで、空間が美しくなっていくんだと思います。オープンは今年の春を目指しているけど、その時点で完璧じゃなくてもいい。自分たちといっしょに、自分たちのペースで少しずつ変化していけたら」。親しみやすい店、でも真似できない、真似したいと思われような空間をつくりたい。目指している先はいっしょ、歩むスピードはゆっくりでも、納得いくまでこだわりたいから。そんなふたりの笑顔に会える店が待ち遠しい。青空の下、パンの香りが漂う外人住宅で。